

## 日本の中国観研究(八)

(2011. 9-2012. 8)

藤田昌志

日本の中国観研究 (八)

(2011. 9-2012. 8)

FUJITA Masashi

### 【摘要】

日本経済長期停滞不前。対与此成鲜明対照の跑在高速增长道路上的中国和韩国抱有复杂抑郁情感的日本人不在少数。日本社会的暗流里存在着排外的、充满了嫉妒的气氛。从甲午战争以来的蔑视感，到或许在哪儿就能突然喷出的那种看不起人的感情不一而足。东京都知事石原慎太郎の尖閣諸島购买方案就是这种情感的表现之一。本考察以在日本出版的有关中国的书籍为资料，考察、分析、探明现在日本的中国观。

**キーワード:**すみません、東アジア共同体、梅屋庄吉、李鴻章、『西遊記』

### 一、序

日本経済は停滞して久しい。対照的に高度成長を走る中国や韓国に鬱屈した感情を抱く日本人は多い。排外的で嫉妬に満ちたエトス（基礎的雰囲気）が日本社会の底流に漂っている。日清戦争以来の蔑視感を基礎にして、「舐められてたまるか」という感情が突発的に噴出する。石原慎太郎氏（当時、東京都知事）の尖閣諸島購入案（2012年4月16日ワシントンでの講演の中で言及）はそうした心情を代弁した面がある。2012年9月10日、野田首相は魚釣島、南小島、北小島の3島を地権者より購入し正式に国有化する方針を最終決定。翌9月11日、日本政府は魚釣島、北小島、南小島の3島を地権者より20億5千万円で購入、日本国への所有権移転登記を完了した。二日前の9月9日、ロシアのウラジオストックで開催されたAPECで、中国の胡錦濤国家主席と野田総理は15分間ほど立ち話をした。尖閣列島購入がその二日後であったことから、中国は面子<sup>めんづ</sup>をつぶされたと激怒した。20世紀は国家の時代であった。21世紀は国家を超える時代ではなかったか。（東）アジア共同体構想を打ち砕く発言で喜ぶ国は一体、どこなのか考えてみればいい。今回も過去一年間（2011.9-2012.8）に出版された中国関連書籍から重要なものを選んで、四つのカテゴリーに分けて日本の中国観（時には（東）アジア観）を考察、研究した。国家を超え

る時代、政治・経済より文化が中心の時代を目指したい。

## 二、日本の中国観研究（2011.9-2012.8）

### I. 社会関連書籍（政治・経済を含む）考察

#### 富坂聡(2011.11)『日本に群がる!中国マネーの正体』PHP 研究所 PHP ビジネス新書

本書はタイトルから想像されるような中国批判一辺倒の雑書ではない。「日本に圧倒的に不足している中国についての正しい認識や知識を補うこと」を目的とした本である。（裏表紙の「内容紹介」による。）著者は北京大学中退であるが実際に中国に住み、中国語が話せる（であろう）ことがテレビで見かける他の「他人からの風聞の受け売り」の似而非中国評論家とは異なる。

序章では中国を一つの国と考えるべきではなく日本でよく言われるような「13 億の市場」というものは端から存在しない、「何を切り捨て、どこを狙うのかを明確にしておく必要がある」（p.25）と言う。

第一章では今後、中国国内で、対内的には政府の内需拡大策、元高による対ドルレートでの中国人資産の膨張によって購買力が高まり、輸入が増大する、対外的には購買力を増した中国から世界にチャイナマネーが溢れ出し、日本にすさまじい勢いで流れ込んでくるだろうと予測する（pp.83-84）。

第二章では日本の中国情報は紋切り型の「決め付け」がまかり通っていて、たとえば「太子党」など実体がないと言う（pp.87-88）。また、中国人が喉から手が出るほど欲しいものとして、日本の資産家の蔵の中に眠っている中国の骨董・美術品、優れた技術を持つ中小企業、日本のサービスを挙げる（pp.102-129）。

第三章では中国人にとって「反日」と「日本製品ボイコット」は別物で、日本製品や日本のサービスは中国ではブランドであること（p.147）、日本はそこに着目し、中国人の日本観光など「高級ブランド化」を目指すべきだと言う（pp. 210-211）。これなどは拝金主義に毒された考えで、少し首をかしげてしまう。

本書の末尾は以下の文でしめくくられている。「中国人のイメージの中にある「日本」は決して競争力の低い「ブランド」ではないのだから。」（p. 221）。だからアイデアを出して日本製品を中国人に合うようにアピールすべきだと言うのが富坂氏の結論である。本書によって日本人の中国、中国人への固定観念がいささかでも是正されるなら幸いである。テレビなどの中国についての報道は「固定観念」の決め付けに満ちている。そのことに日本人はそろそろ気づくべきである。

<sup>かずゆき</sup>  
**井上一幸(2011.12)『「すいません」が言えない中国人 「すいません」を教  
えられない日本人—中国人と日本人のための研修テキスト—』健康ジャーナル社**

井上氏はアジア財力カンパニー株式会社代表取締役。本書は中国人に対する日本人の本音を語り、中国人社員とのつきあい方を再認識するきっかけとなること（まえがき p.4）を目的とする。

全体は五回に分かれる。第一回「すいません」が世界を変える がとりわけ興味深い。「すいません」(=すみません)には①依頼②感謝③思いやり——の三通りの意味があり、このうち最もよく使われ大事なものは③思いやりの「すいません」であると言う。これは「私はあなたの気持ちをわかっています」という意味で、この場合の「気持ち」とはつらさや悲しさ、困惑、負い目、気分を害したなどの「負」の気持ちに限る。「謝罪」とは全く違い、「感謝」の「すいません」に近い。相手の気持ちを共有する、あるいは共感すると言ってもいい (p. 32)。例として次のような会話を挙げている。「昨日頼んだあの資料できてる?」「えっ、まだですよ。いま〇〇（別の仕事）やってるんで〜。」こうした他人事のような対応を日本人は嫌う。次のように言えば平和な会話になると言う。「昨日頼んだあの資料できてる?」「すいません、〇〇で手間どってしまって。すぐやります」「あ、いいよいいよ……。でも、いつになるかだけ教えてくれないかな?」「すいません」が入ることによって相手の負の気持ちを理解していることがちゃんと伝わる (p. 34) のである。

中国人は「謝らない」から嫌いだと日本人はよく言う。これは中国人に限らず、広く外国人に対する日本人の感情である。しかし、中国人が日本人に「謝」っても更に、「思いやり」の「すいません」まで使えるようにならないと日本人社会では円滑にコミュニケーションをとっていけないであろう。

一方が「すいません」と言ったら、他方は「いえ、いえ」とか「いえ、いいんですよ」と言う。「すいません」が「あなたの負の気持ちを理解しています」という思いやりのサインだとすれば、それに対する返事の「いえ、いえ」はその思いやりを受け取ったというサインなのである (p. 34)。日本は「共有」「共感」を第一に考える社会である。それを過去のように「村社会」「集団主義」「個の埋没」という言葉で片づけ、全否定してしまうのは思慮が浅い。もっとも「個の尊重」も大切である。そうした面の日本と他文化についての斬新な比較研究を進める必要がある。そういう時代に我々は生きている。

<sup>そえじま</sup>  
**副島隆彦 (2012. 1)『中国は世界恐慌を乗り越える』 ビジネス社**

中国人の都会の月給は今 (2012 年 1 月時点)、平均で 3000 元 (4 万円弱)。高給取り (及

び公務員)は5000元、7000元(約10万円)である(pp.78-79)。しかし、実際の中国人は自分の月給の3倍くらいの生活をしている。月給の三分の一くらいを平気で支出して友人達に大盤振る舞いをする。中国人の散財文化は10世紀の宋代以来のことで、一人が様々な収入手段を模索し、アルバイトをする。副島氏は日本人思想家として、この中国人の大きな贅沢消費文化の謎の解明をやり遂げたい(pp.79-80)と言う。近代化を経済で見ると、一つの側面に単純化があり、具体的に言うと単一の収入源と単純な貨幣流通制度である(p.80)が、宋代以来、中国人の収入源は多種多様なのである。(そして、表向きの収入と実際の収入が異なる。)このことは中国人の収入は日本人の十分の一、台湾人・韓国人の収入は日本人の収入の半分という日本人の持つ固定観念(だから日本人より下だという固定観念)が当てにならないものであることを教えてくれる。(私は中国を日本人の物差しで測ってはいけないと何度も言ってきた。)

やりすぎたアメリカの、過剰に金融中心の資本主義経済が今や、ぶっ壊れかかっている(p.109)。金融だけが過度に進んで金融工学が異常な発達をとげ、リーマン・ショック(2008年9月)で大爆発を起こした、すべてがいびつな金融バクチに過ぎないことが明らかになった(同頁)。欧米白人達はイスラム経済や中国経済を遅れた経済システムだとずっと言ってきた(同頁)が、もはやそんなことは言えない。相も変わらず政治は共産主義(それも一党独裁!)、経済は資本主義ではいつか崩壊すると言う反中論者がテレビによく出ているが、“和谐”(調和)社会を共産党が目標にするのはもうネットなどの民衆パワーを無視できなくなっているからである。固定観念、思いこみの日本の中国観をそろそろ捨てたらどうか。テレビの解説委員もよく知らない中国のことを固定観念、思いこみで解説するのはやめた方がいい。いい加減な解説はすぐ分かる。

民衆パワーに関連して、副島氏の民衆暴動についての記述はおもしろい。「中国で民衆暴動(社会騒乱事象)とされるものの典型は、地方の共産党の横着な幹部が交通事故を起こして人をひいてしまった場合だ。この幹部は警察に逃げ込んで、自分が幹部であることを理由に事件が犯罪として捜査されないように押さえ込もうとする。それを民衆が許さない。警察署(民衆はいつもひどい目に遭っている)を何千人もで取り囲んで石を投げ始める。これがデモクラシーだ。これこそ本物のデモクラシー(民主政治)である。しかも、民衆が直接参加するまさしく直接民主政治(ダイレクト・デモクラシー direct democracy)である。私はこのように考える。」(p.209)。中国の都市の真ん中には必ず広場がある。ヨーロッパの中世都市と同じで、大きな事件が起きると民衆は表に出て広場に結集して大声で騒いで、自分たちの運命を自分たちで決める(pp.209-210)ためである。日本には「敗戦後に、アメリカから与えられたデモクラシー」しかなく、「日本人はアメリカに洗脳され

て、自分たちは自由主義国だから中国の独裁体制よりはすばらしいと信じ込んでいるだけだ」(p.210)と副島氏は言う。

2010年9月7日の尖閣諸島沖漁船衝突事件についてははっきりと次のように述べている。同事件（尖閣諸島沖で日本の海上保安庁の船4隻が中国漁船一隻を4時間追い回して、挟み撃ちにして<sup>だほ</sup>逮捕した事件）は「前原が外相として実行した。それで前原に対して中国は今も激しく怒っている。日中の外交協定（秘密条約）で「境界不確定海域では、それぞれの国の漁船はそれぞれの海上警察が取り締まる」としてあった。それをアーミテージらの指令で、日中を故意に陰悪にするために、前原の権限で海上保安庁の船を動かしたのである。」(p.137)。これで海上保安庁の船4隻が4時間、<sup>しつよう</sup>執拗に中国漁船を追い回した理由がはっきりした。副島氏は実地調査に基づいて西部大開発（沿岸部の北京、上海、広東省の先進地帯の工場を、本当に内陸部に移すという巨大な経済計画）が本気で実行に移されていると言う (p.212)。

まごさきうける

#### 孫崎 享 (2012.3)『不愉快な現実——中国の大国化、米国の戦略転換』講談社現代新書 2149

孫崎氏は元外務省国際情報局長、駐イラン大使、防衛大学校教授（2009年まで）を歴任した人である。「日本人」の中国観の半分をみごとに言い当ててている。日本は明治時代以降、過去150年間「中国に未来はない」「西洋の文明國と進退を共にし、(中略)正に西洋人が之に接するの風に従て處分す可きのみ」(福沢諭吉「脱亜論」)と生きてきた。そして、その方針はそれなりの成功を収めてきた。150年の歴史の中、この考え方は日本人の中に深く浸透している (p.273)。それに対して、孫崎氏は「中国が大国になる」「米国に依存するだけでは日本の安定と繁栄がある訳ではない」「日本は過去150年と異なった戦略を出す必要がある」と力説するが、多分、多くの国民の耳には届かないと考える。それでも、何人もの論者が繰り返せば、その積み重ねの上に、新たな認識が出る (p.273)と確信して、本書を書いたとのことである。誰かが登りきると確信してノルマンディの崖をよじ登った多くの兵士のように「犬死に」覚悟で書いたと思われる (pp.273-274)。

アメリカ要人は今や日本要人より中国要人を「自分に近い」と思っている (pp.40-41)。一般的なアメリカ人も2011年にそれまでと逆転し、中国を日本より重要と見なすようになっていく (pp.9-11)。それを裏付ける事実がある。2006年頃からアメリカの対中輸出は対日輸出を抜き、差は広がってきている (p.34)。

アメリカは1996年以降一貫して、「尖閣列島で日中のいずれの立場も支持しない」としている (p.138)。日本の政策は北方領土、竹島、尖閣諸島において（隣国と）対立的で

あるが、それは「自身(の主張)への関心」が高く、「他者(の主張)への関心」が低いことに起因する(p.223)と言う。相手国の主張に耳を傾けることが出来れば、「自身への関心」と「他者への関心」のバランスがとれ、「妥協」や「問題解決」に進む(pp.223-224)ことができる。「領土問題は存在しない」と前原氏が言えば、領土問題がなくなるわけではない。(逆に新たな問題の火種になる。)吉野作造は1918年(大正7)1月発表の「我が国の東方経営に関する三大問題」で、国防問題より、経済問題、文化問題を重視すべきであると主張し、「自己の立場を主張するに急にして、全然相手の立場を顧みない」日本人の「島国根性」を批判している。(吉野作造(1996)『吉野作造選集 8』岩波書店 pp.288-313。)

現在にも当てはまる言辞である。

アーミテージ(元国務副長官)、ジョセフ・ナイ(元国防次官補)、ケビン・メア(元国務相日本部長)の発言を見れば、日米関係に関与してきた人物がいかに東アジア共同体を警戒しているかがわかる(pp.260-262)。彼らは東アジア共同体でアメリカが「外<sup>はず</sup>されている」と感じたら、おそらく報復に打って出るだろうと言い(ナイ)、鳩山政権の東アジア構想など中国の思うつぼで、中国に騙されてしまう、中国は共産主義国家と言うよりも独裁国家であることがわかっていないと言う(メイ)。東アジア共同体構想については日本の学者にも進藤栄一氏や谷口誠氏などの熱心な推進論者がいる。しかし、構想だけではだめで、「それを推進する政治的な力が必要である。残念ながら、いま、東アジア共同体にはそれがない。」(p.263)と孫崎氏は言う。そこには冷静な現実認識がある。

## 白石隆 ハウ・カロライン(2012.7)『中国は東アジアをどう変えるか』中央公論新社 中公新書 2172

本書の結論は以下のものである(pp.213-222)。①中国の経済的台頭、その南シナ海の領土問題への対応から考えて、2010年以降はアメリカを入れ込んだアジア太平洋を枠組みとする地域協力が重要となりつつある。②東アジア(著者は東南アジアを含めている。)の国内政治の要請が経済成長の達成にあるところ、たとえばタイ等は経済的に躍進する中国に関与しようというインセンティブ(刺激、誘因)は大きくなる。③経済協力面では、ラオス、ミャンマーでは、かなり安定的な同盟がこれらの国々の政治エリート、ビジネス・エリートと中国の間で形成されており、日欧米中心の従来の経済協力、政府調達のルールとは違うルールが生まれる可能性がある。

以上は現状についての結論であるが、チャイニーズについて次のように言うのは世界のアメリカナイゼーションの「確認」である。「中国の台頭とともに、東南アジアのチャイニーズがこれから大陸のチャイニーズのようになる」といったことはまずありえない。一九世

紀末以来、この一世紀余の海のアジアの歴史を見れば、この地域でチャイニーズの主流となっているのはアングロ・チャイニーズであり、この趨勢は、グローバル化とともに、これからますます進展する。」(p.197)。「グローバル化の趨勢、中国（中華人民共和国）の経済的台頭、国境を越えたヒト、モノ、カネ、情報の流通を考えれば、大陸のチャイニーズ、特にそのエリートの「アングロ・サクソン化」はおそらく確実に進むだろう。」(pp.197-198)。京都大学東南アジア研究センター元教授（白石氏）と現准教授の著書である。中国語は読めるのだろうか。英語は理系ではもはや必須だが、文系ではその専門、地域の語学ができるのが必須だと経験から思う。

## Ⅱ. 語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察

### 井沢元彦(2011.9)『小説 友情無限 孫文を支えた日本男児』角川書店

井沢元彦氏は日本=「言<sup>こと</sup>霊<sup>たま</sup>」の国や『逆接の日本史』シリーズで夙<sup>つと</sup>に有名な、歴史推理・ノンフィクションに独自の世界を開拓した人である。2010年8月から2011年2月「夕刊フジ」に連載された小説「友情無限」（本書では第一部として収録）に大幅な加筆修正を加え、三部構成にしたのが本書である。

梅屋庄吉の私心のない孫文への革命援助を描く。日本では宮崎滔天ほど有名ではなかった梅屋庄吉は本小説で映画ビジネスの成功者としての面がよく描かれている。梅屋庄吉が孫文に提供した革命資金は今日の金額にすると、少なくとも数百億円にのぼると見られる(p.427)。(一兆円という説もある。) エピローグでは極東軍事裁判で死刑判決を受け処刑された廣田弘毅<sup>ひろたこうき</sup>の唯一の悔いを昭和12年から13年にかけて、大日本帝国と中華民国国民政府蒋介石との和平交渉がもたれていた時、「正面から蒋介石と話し合っていれば、そしてあの時に梅屋庄吉がいてくれたら」と描写している。日本人にとって梅屋庄吉のような人がいたことは日本近現代史の救いのように思える。

2010年8月24日、上海国際博覧会の日本館で梅屋のひ孫が孫中山故居記念館の協力を得て、庄吉夫妻と孫文夫妻の交流のドキュメンタリー、手紙、記念写真など約74点の展示を行った。(読売新聞2010年8月25日の13版35面に「孫文の資金援助、梅屋庄吉を上海万博で紹介」した記事がある。ウィキペディア 2011年10月8日より。)

梅屋庄吉は日比谷松本楼、創業者、小坂梅吉と姻戚関係にある。また、日活の前身の一つであるM・パテー商会の起業家の一人でもある。・孫文との交流を記した日記や書簡は日中関係への配慮から1972年の日中国交正常化まで遺族は公開しなかった。・孫文の死後、四つの銅像を広州、黄甫、南京、マカオに建立した。銅像は文化大革命期に撤収される危機に見舞われたが、周恩来の尽力で守られている。晩年は千葉県夷隅郡岬町の別荘で静養

した。日中関係の悪化の際に、外相廣田弘毅に改善の談判に赴こうとした途上、別荘近くの三門駅で急死した。(ウィキペディア 同日による。)近衛文麿、廣田弘毅、梅屋庄吉といった日本人の歯車がかみ合わなかった悲劇が日中戦争の泥沼化を招いたとも言える。

ヤンイー  
**楊逸(2011.10)『獅子頭(シーズトォ)』朝日新聞出版**

楊逸氏は芥川賞作家。「獅子頭(シーズトォ)」はミンチボールを大きくしたような中華料理の名で、ライオンの頭のように見えることから、その名があるという。小説は雑技学校(サーカス学校)を怪我のためにやめて、料理人になった二順<sup>アーシュン</sup>(獅子頭が得意料理)が日本にきて、高給中華料理店で働くうち、店でウェイトレスをしていた幸子との間に子供ができてしまい、幸子に迫られて、結婚し、町の中華料理店を開く、そこへ日本に高給中華料理店の獅子頭担当として(やめた二順の欠を埋めるため)二順の新婚妻がやってくるという内容である。

表現には「涙がネックレスの糸が切れたガラス玉のようにぼろぼろと雫れ落ちている」(p.303)、「(今の大连は)高層ビルなんかは収穫する前の畑の大根のように、ぎっしり建っちゃってるし」(p.364)など芥川賞をとった際に選考委員の宮本輝氏らが眉をひそめたものも相変わらずあるが、楊逸氏は気にせず使用している。ピジン日本語はこうしてできていくのだろうか。

小説の末尾は以下のように、二順と二順の中国の実の子供、雲舞の会話である。

「パパがママのことを大事にしていれば、きっとママもパパを大事に思ってるよ」

(中略)

「老爸、大事にしてくれる人を大事にしなくちゃ」

雲紗(筆者注: 二順の中国の妻。雲舞の母親。)に似た涼しげな目に意味ありげな笑みを漂わせる雲舞が見えたようだった。

大事に思う人、自分を大事にしてくれる人。——雲紗の顔、美栄子さん(筆者注: 幸子の実の母親。)の顔、涼太(筆者注: 二順と幸子との間の子供。)、幸子の顔、次々と目に浮かんできた。

二順は握った拳で自分の頭を何度か叩いて、しだいに顔を緩めた。(pp.447-448)

楊逸氏から見て、二順とその娘雲舞にとってこの世で一番、大切なものは人間関係のようである。小説は日本人、中国人入り乱れての人間関係のからみ合いを描いている。日本人の中国観も多様化し変わっていくことを予感させる。



岡本隆司(2011.11)『李鴻章——東アジアの近代』岩波書店 岩波新書(新赤版)

1340

本書は戦後日本で初めて書かれた李鴻章の評伝である。曾<sup>そう</sup>国<sup>こく</sup>藩<sup>はん</sup>、李鴻章、袁<sup>えん</sup>世<sup>せい</sup>凱<sup>がい</sup>は近代中国における軍事面の太いラインである。李鴻章は進士(科挙の最終試験)合格のために曾国藩を師として選び、首尾よくパスする。師事できたのは李鴻章の父、李文安が曾国藩と進士合格の同期だったという縁故があったからである(p.6)。

1851年(咸豊1)1月、太平天国が蜂起し、2年後、曾<sup>しやう</sup>国<sup>こく</sup>藩<sup>はん</sup>は湘軍(筆者注:「湘」は曾国藩の出身地、湖南省のこと。)を結成する。郷里で母の喪に服していた曾国藩は北京政府から湖南の「団練」(自衛団・義勇兵)を編成指揮して、匪賊鎮圧にあたるように命令される。曾国藩は在来の正規軍や「団練」組織に安住せず、農民を高給で雇い、兵士にさせて部隊を編成する(pp.30-31)。また、親しい同郷人を部下の将校にして部隊を統率させた。曾国藩は儒教を排撃した太平天国に対抗し、儒教の人倫・道徳を前面に出して湘軍(曾国藩の私兵と言ってよい)を組織した。

1862年(同治1)2月、李鴻章は淮<sup>わい</sup>軍(「淮」は「淮河」とくに安<sup>あん</sup>徽<sup>き</sup>省の流域を指す(李鴻章の出身地域である。))を組織する。湘軍が知人の知識人を将校にして、純朴な農民を兵士にしようとしたのに対し、李鴻章は土豪の宗族に基づく既成の「団練」をそのままリクルートし元来の特徴を引き継ぐ道を選んだ(p.56)。(そのため統率がとれないこともあった。)同年4月、上海に到着した李鴻章は外国軍、常勝軍の洋式装備、とくに新式鉄砲に驚嘆し、最新鋭の武装を整える。4月5日、江蘇巡撫代行の正式な任命を受け、この地の官僚として最高の地位に昇る。(そしてやがて、上海の豊かな財源を掌握するに至る。)李鴻章は外国の兵器を購入するだけでなく、それを製造する機械工場を建設、操業し手かけた。「洋務」運動の始まりである。李鴻章は1863年、蘇州を開城、翌年、常州を陥落させる。7月、天京(南京)が陥落して太平天国は滅亡する。

1871年9月、日清修好条規が調印される。最恵国待遇条項がなく、領事裁判権も相互に認め合う、対等関係で結んだ条約であった。岡本氏は、第一条の文面の一部、「両国に属したる邦土は、各礼を以て相待ち、聊<sup>いささかも</sup>侵越する事なく、永久安全を得せしむべし」を日本に対する「警戒」、第二条の「若し他国より不公及び輕<sup>も</sup>藐<sup>びよう</sup>する事有る時、其<sup>その</sup>知らせるを為さば、何れも互に相助け、・・・程<sup>ほど</sup>克く取扱い、友誼<sup>あつ</sup>を敦くすべし」を日本との「連合」を表しているとしている(p.111)。問題は第一条の「属したる邦土」(「所属邦土」)で、具体的には台湾や琉球が問題になる。結果的には、清は朝貢国も含むとしたのに対して、日本は朝貢国を含まないとし万国公法で押し通す。1874年(明治7)の台湾出兵、1879年

(明治 12) の琉球処分と「所属邦土」の解釈は日本と清朝の間ですれ違ったままである。

1882 年 (明治 15) 壬午変乱。1882 年 8 月 30 日の済物浦条約<sup>さいもつぽ</sup>は一見、朝鮮が日本に対して江華島条約(1875 年)で定めたとおり、「自主」をもって「平等」に交渉したものである (pp.144-145) が、實際上、朝鮮に指示を与えたのは、馬建忠であった。つまり「壬午変乱の結果は、馬建忠自ら定義した「属国自主」、「属国」の実体化と「自主」の名目化に即したものだ。以後の清朝の朝鮮政策も、その路線が貫かれる」(p.145) と岡本氏は評する。馬建忠は朝貢国路線。日本は万国公法路線。万国公法路線の日本は「属国」で「自主」などというのは理解できない。「属国」というのも今の現代人の感覚とは異なることにも注意を要する。従来、「属国」となり朝貢していても「自主」はあったのである。

1884 年 (明治 16) 甲申政変。日本の後ろ盾のある独立党<sup>キムオクギョン</sup>の金玉均らは文字通り三日天下で、袁世凱率いる淮軍の攻撃を受けて、日本に亡命。会派はほぼ潰滅する。クーデターを鎮めた袁世凱はこの功で李鴻章の抜擢を受け、1885 年秋から北洋大臣派遣の代表としてソウルに駐在し、後、頭角を現すことになる。

李鴻章は日清戦争では講和交渉が行われる中、経過を列強に通報して、干渉を働きかけ、干渉を確実なものにしてから下関条約に調印している (p.181)。粘り腰の李鴻章。勝海舟は李鴻章<sup>らつわん</sup>の辣腕を高く評価した。両人とも戦争はしたくなかった。他方、伊藤博文と陸奥宗光は戦争に積極的だった。

唐宋以前の中国古典と民国以後の現代にしか関心を持たないのは日本人の中国認識の大きな欠陥である。江戸と明治を知らなければ、現代日本がわからないのと同じように、清代と清末、つまり李鴻章の時代の中国を見なくては現代中国もわからない (p.214) と岡本氏は言う。「歴史」と「教養」を重ねる立場である。近代は国家の時代だが、「国家」の概念が日本と中国では異なっていた。近代国家は徴税権と徴兵権を持つ。国家の三大要素は土地、人民、権力である。当然、争いが起こる。武器商人が暗躍する。いや公然と「正義」の名の下に局地戦を仕掛けている。もう国家はうんざりだという声が聞こえてくることがある。

## 相原茂(2012.1)『相原先生の謎かけ中国語講座』講談社

相原茂氏は著名な中国語教育の専門家である。その著『Why? にこたえるはじめての中国語の文法書』(同学社)は「その時点での最良のレベル」の文法書を作ろうとする、氏の精神が現れた書である。氏は元来、「猜謎」(中国語のなぞなぞ)に関する本を何冊か出されていて、これもその一つである。「実践編」の「179 番より」22 問用意された“文字謎”(“物謎”(物を当てるなぞなぞ)に対して、「文字」自体を当てるなぞなぞ)は漢字の

象形性を彷彿とさせる。例えば 179 “本来是个字，细看不是字，字上加两点，又变一个字。”（もともと字だが、よく見ると字ではない、字に 2 点を加えると、また違う字になる。）（p.141 答「学」）、190 “一个白天跑，一个夜里转，两个碰了面，才能耀人眼。”（一つは昼に巡るもの、一つは夜に動くもの、二つが顔を合わせれば、これはこれはまぶしくなる。）（p.146 答「明」）。1923 年 7 月、北京八道湾の家を弟周作人の日本人妻、羽太信子のために追い出された鲁迅はしばらくしてから“宴之傲者”というペンネームを使った。“宴之傲者”（“宴”はウ冠（=家）の中にいる「日」本の「女」、つまり羽太信子のことを指し、“傲”は「出す」「放つ」（=追い出す）という意味である。）＝「日本の女に追い出された者」。“我是被家里的日本女人逐出的。”（「私は家の中にいる日本の女に追い出されたのだ。（それでそれをペンネームにした。）」）と鲁迅は許広平に語ったと言う（許広平《欣慰的纪念 略谈鲁迅先生的笔名》。主編 李何林（1983）『鲁迅年譜（二）』人民文学出版社 p.105）。事の真偽はともかく、象形性は中国文化の中に脈々と流れているように思える。

### 太平洋戦争研究会編 森山康平著(2012.3)『満州帝国 50 の謎』ビジネス社

本書は日本が満州とかかわりを持つようになったいきさつから説明し、満州国の成立と崩壊について記した書である。

日本が満州（中国東北部）に拠点を築いたきっかけは日露戦争である。日清戦争は「朝鮮（李王朝）から清国の勢力を追放して、代わって日本が朝鮮を支配しようとして始めた戦争」（p.8）であった。日本軍は鴨緑江を越えて満州に入り、清国艦隊の根拠地であった旅順を占領した。日本はロシア、ドイツ、フランスの三国干渉によって遼東半島を清国に返還するが、そこにロシアが進出した。ロシアはモスクワからシベリア鉄道を建設し、ウラジオストクまで延ばし、更にハルビンから旅順までの鉄道を敷き、旅順にロシア太平洋艦隊を置く。ロシアはその上、鴨緑江を越えて朝鮮に進出しようとした。日本は朝鮮だけはなんとしても支配しようとしていたので、ロシアに宣戦する。それが日露戦争である。

ポーツマス講和会議で朝鮮について独占的支配を認められた日本は着々と朝鮮の植民地化へ歩みを進める。満州についてはロシア軍が撤退することになり、「ロシアが清国から租借した関東州（筆者注：旅順と大連を含む遼東半島の先端部分）と長春までの東洋鉄道南部支線を、清国の了解さえ得られれば日本に譲る」（p.10）こととなった。「戦力なき清国政府はやむなく日本にその権利を認めなければならなかった。」（p.11）。かくて日本は満州に拠点を築いた。「武力」で関係が決まった時代である。そこには「武力への信仰」という異常なものが感じられる。

当時、自動車も飛行機もなく、鉄道が重要な交通手段であった（p.14）。満鉄（日本が経

営権を取得した)の主要駅奉天(現瀋陽)には日本人町が形成された。

満州国における日本人の地位は日本占領中のアメリカ人のようなもの、いやそれ以上で(p.14)、法律で定められていたわけではないが、日本人は一等皇民(天皇の民)、朝鮮人は二等皇民、満州人(漢民族、満州民族)は三等皇民だった(p.141)。主食の配給にも差があった。「五族共和、王道楽土」のスローガンが虚しく響く。

### Ⅲ. 文化・比較文化関連書籍考察

#### 磯部彰(2011.9)『旅行く孫悟空 東アジアの西遊記』塙書房

本書は『西遊記』に関する研究の一つで、『西遊記』が東アジアの人々にどのように受け取られたか、という視点でまとめられたもの(あとがき p.243)である。

中国では唐宋時代ごろまでは、仏教信仰の中で唐三蔵伝説が盛んに作られていたため、主人公は聖僧唐三蔵であったが、孫悟空の登場で神通力を持たない唐三蔵は脇役に転落した。同時に、敵役として猪八戒が位置づけられた。斉天大聖孫悟空やごろつきの猪八戒は中国の地域を代表する地方劇の主役にもなったが、これは明末社会が多様な階層や宗教から成り立っていたことを反映するのだろうと磯部氏は推測する(p.235)。

日本では三蔵法師は奈良、平安時代以来、高僧として尊崇してきた長い歴史があり、江戸時代には天子(釈尊)から命を受けた将軍(三蔵法師)が配下の武将(孫悟空や猪八戒・沙悟浄)を使って幕府にはむかう謀反人(妖怪)を退治して天下を太平に導く(経を取る)と考えたとも思われることから三蔵法師にも人気が集まった。現在でも三蔵法師を演じる俳優には注目が集まっている(p.236)。こういう説明の仕方は無意識による選択の由来を説明していて興味深い。

朝鮮半島では朱子学が国家の柱となったが、<sup>ヤンベン</sup>両班以下知識人層は正統論を重んじ、忠君愛国を説く『三国志通俗演義』を最も重視した。反対に『水滸伝』は「こそどろの本」とみなされたい。そうした儒学的小説観の中で、悟りの世界を目指す内容の『西遊記』では、主人公の孫悟空は、関羽と同様に勧善懲悪の実行人と見られる傾向にあったのではないかと磯部氏は言う(p.238)。

ベトナム・チベット・モンゴルでの受容も考察されている(Ⅲ章、Ⅳ章)。本書は『西遊記』の受容の相違から東アジアの個性について考える。文字文化の担い手としての知識人の役割、儒教的制約の有無など考えがステレオタイプになってはいけませんが、東アジアを考えることはそれぞれの文化の個性、特徴を考えることでもあると思う。

#### 円満字二郎(2011.10)『政治家はなぜ「肅々」を好むのか 漢字の擬態語あれこれ』

## 新潮社 新潮選書

本書は日本の漢字の擬態語をテーマにして、通時的(=歴史的)に日本人がどのように「中国古典の擬態語を自分たちのものとし使いこなし、新たに日本語オリジナルの“独自の世界”を切り拓いたか」(p.219)について論じた教養あふれる書である。著者の漢字関係の該博な知識と鋭敏な着眼点、論の展開力には驚かされる。おそらくは高校国語教科書や漢和辞典などの編集を17年近く担当する中で力を培われたのであろう。

本書のタイトルにある「肅々」については次のように説明する。「肅」には元来、「おごそかに」という意味があるが、『詩経』の詩では「肅々」は北風が「びゅうびゅう」吹くというときの擬音語や鳥の激しい羽ばたきを意味している、日本では頼山陽の「べんせいしゆくしゆくよる鞭声 肅々夜かわをわたる過河」が用例として最も有名で、その「肅々」は上杉謙信が武田信玄の本陣に不意打ちをかけた川中島の合戦をうたった日本漢詩の一節にあり、それは「しずしずと」と、そして鞭の音が「一糸乱れぬ上杉軍団の行動を象徴するもの」として頼山陽によって用いられた。しかし、明治から昭和にかけて、また現在の政治家は「日常のやり方と変わらず」という意味で使うようになり、そこに日本語オリジナルの表現として“独自の世界”を展開することになった(pp.194-206)。日本人は漢字の擬態語を「日本語化」したと言う。同様の例には「堂々」「丁寧」「擲揄」「逍遙」「酩酊」「切々」「悠々」などがあり、著者はその来歴を丹念にたどっている。これは共時的視点に対する通時的視点の重視である。言語への愛惜と教養によってはじめて可能な成果である。これからの日本語教育、国語教育の新しい視点、視野を示唆している。無味乾燥な知識の理解と暗記では学ぶ側にとって語学学習は苦痛でしかないであろう。

本書は外国語のイメージが本来の意味、イメージからその国のイメージに転化し定着する道筋をトレース(追跡)している。日本語とは何か、日本人とは何かに迫るオリジナリティー、本質性を持っている。

## 張競(2011.11)『異文化理解の落とし穴——中国・アメリカ・日本』岩波書店

張競氏は比較文学・比較文化論を専門とする明治大学国際日本学部教授。(2011)『海を越える日本文学』(ちくまプリマー選書)は日本文学の海外での読まれ方を考察した秀作である。本書を読んで、まずその日本語力に驚かされる。本のタイトル『異文化理解の落とし穴——中国・アメリカ・日本』の意味は「異文化理解」は自分が所属する文化を熟知することを前提としており、それをすべて知るのとは不可能であるから、「自国の文化もよく知らない人が、どのように異文化を理解するのだろうか」(はじめに pp.viii-ix)ということらしい。張競氏は「文化」とはそもそも曖昧で、中身はたえず変化するものだから、

「異文化理解」より「異文化を知る」ことの方が重要だと言う。前者は他者理解の願望から始まり、最終的には自己認識に帰結し、文化法則の発見を意図しているのに対し、後者は観察の方を重視する(同上)。本書は多様な異文化の出会いと、その折々に著者がめぐらした思いの記録である。

I. 常識の違い、良識の尺度      の 20 清潔感と異文化理解      は深い文化考察である。日本に永住帰国した、著者の知人の中国残留孤児の子供は小学生で、本人は清潔にしているつもりだが学校では同級生から不潔だと言われ誰も友達になってくれないと言う(p.47)。張競氏は「清潔感」には客観的にきれいであるかどうかは必ずしも関係なく、そこには価値判断が介在していて、「内」「上」「善」「貴」「聖」が清潔で、「外」「下」「悪」「賤」「俗」が不潔だという先入観があると言う(p.49)。残留孤児の子供が「不潔」と言われたのは、清潔感の尺度が中国と日本で異なる(ex.中国では足を洗わないで寝るのは不潔とされている)という文化の違いに加えて、同質性の欠如も原因の一つであろうとしている(p.50)。近代以前、村落共同体は同じ生活リズムや儀礼を共通性の基盤としていたが、大衆消費時代に入ると、ライフスタイルが多様化し従来の共同体感覚が失われ、そのかわり「衛生」の観念にもとづく清潔感が広域の共通性を持つようになった、そして「清潔さ」が同質性をはかる一つの尺度になったと言う(p.50)。この人の知識は広く、考察は深い。

日本文化と中国文化について考える場合、第三者の視点がきわめて役に立ち、思わぬことが見えてくることがあるし、知っているはずのことについて再認識させられることもある。第Ⅶ部「アメリカという測量点」では文化の第三者との遭遇と驚きを記している(はじめに vi)。著者は2007年4月からアメリカに長期滞在した経験を持つ。アメリカの「多様性」を好む点を高く評価する。「多様性」を尊重するので一斉にナショナリズムに走る可能性が低い。アメリカの大学についての日本神話がある。アメリカの大学生が一生懸命勉強しないと卒業できないと言われているのは日本神話のようである。アメリカの学部教育は大体、日本の大学教養教育に相当し、学部留学はさほどメリットがないと思うと言う

(p.226)。覚醒剤汚染はアメリカの大きな社会問題となっていて、「いまや麻薬はすでに米国の大学文化の一部になって」いる。違法薬物使用は大学生にとってほとんど通過儀礼になっている(p.226)。現状を知らずに留学を「良いことづくめのように宣伝するのは無責任である」(p.227)と張競氏は言う。アメリカン・スタンダードはグローバル・スタンダードではない(p.233-234)。日本人の外国観はいつもムード的で、社会ダーウィニズムの域を出ることは非常にまれである。

#### IV. その他の書籍考察

**〔著〕 宋文洲 〔協力〕 NHK「仕事ハッケン伝」(2012.6)『人生を面白くする! 仕事ハッケン術!』主婦と生活社**

宋文洲氏は元中国人留学生で、1992年にソフトブレインを創業し、2005年に東証一部上場を果たした。成人後に来日した外国人初のケースである。2006年にソフトブレインの経営を後進に譲ってからは大手企業のコンサルタントを務めながら、各メディアで経済評論家として活躍している。

本書はかつての中国人留学生で、けた外れの成功者である宋文洲氏がヤマト運輸や餃子の王将、ローソン、ユニクロ、グーグル等の「日本的」なものについて考察し、意見を述べた、氏の「日本観」の表出された書である。「日本の中国観」と対をなす「中国の日本観」である。こういうものも時には対象にして考察したい。

宋文洲氏は多くの日本企業は「あくまで先輩が後輩を教えるカルチャーになっている(p.44)、アジアは欧米先進国のものをなんでもありがたがるわけではなく、自分たちの事情に合ったもの(たとえば日本の化粧品)を求めている——いわば「先進性のローカライゼーション」である(p.109)と言う。2012年早々、宋文洲氏はローソンの<sup>にいなみ</sup>新浪社長やローソン幹部と上海で中国に駐在している若手のローソン本社社員と会議をし、夜の懇親会に参加した。総勢約50名のうち三分の一は日本の大学を卒業後、ローソンに入社した中国人社員である。その中に泣いている20代の中国人社員がいた。日系の同業他社に負けたのが悔しいのだと言う。新浪社長は「嬉しいですね。あんなにローソンを思ってくれて、絶対に負けたくないというんだから」そう言って少し目を細めた。宋文洲氏は次のように言う。「彼は新浪社長がいたからこそ涙を流したのだと思う。それは、泣いている自分を新浪社長に見せたいという意味ではない。成長を続けるマーケットで他社と競うのは、いわば戦争である。毎日厳しいビジネスが続く。その最前線に最高司令官が自ら来てくれる。感激しないはずがない。この人のために働こうと、中国人だって思う。」(pp.185-187)。元来、中国人は「会社」のために働くのではなく、感動した「人」のために働くのだと思う。(従来、そのことを指摘する書もある。)これはその好例である。“朋友”(=「友人」)もこの場合の「人」と同じ概念である。「国家」は元来、中心ではない。中国の近代史を勉強すれば、そのことがよく分かる。

**編集人 小室博一 (2012.8)『JTBの交通ムック 14 新幹線と世界のライバル』JTBパブリッシング**

本書の「中国高速鉄道の実力」(草町義和 執筆)(pp.114-121)は、中国高速鉄道の歴史と実力を考察している。1978年(昭和53)10月、鄧小平氏は日中平和友好条約締結

のため訪日し、東海道新幹線に乗車して、「速い!後ろからムチで追われているようですね。これは今我々が必要とするスピードです。」と語った (p.116)。もっとも中国の鉄道の近代化は改革開放路線の中でも遅々として進まず、まず在来線の高速化を進めた。高度経済成長を背景として、1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて別線方式の本格的な高速鉄道の整備が考えられるようになった。2011 年 7 月 23 日、温州で高速列車同士が衝突し、死者 40 名の大事故が起こった。主原因は車両側ではなく、「地上側の信号システムにある」と見られている (p.121)。少しペースダウンして様々な問題を考えるべきではないか(p.121)と草町氏は言う。

【付記】本稿は日本比較文化学会関西支部 2012 年度 10 月例会（10 月 20 日 於同志社大学今出川校舎）で発表した内容をもとにして作成したものである。

#### 【引用文献・参考文献】

- (1) 井沢元彦(2011.9)『小説 友情無限 孫文を支えた日本男児』角川書店
- (2) 磯部彰(2011.9)『旅行く孫悟空 東アジアの西遊記』塙書房
- (3) ヤンイー 楊逸(2011.10)『獅子頭(シーズトォ)』朝日新聞出版
- (4) 円満字二郎(2011.10)『政治家はなぜ「肅々」を好むのか 漢字の擬態語あれこれ』新潮社 新潮選書
- (5) 富坂聡(2011.11)『日本に群がる!中国マナーの正体』PHP 研究所 PHP ビジネス
- (6) 岡本隆司(2011.11)『李鴻章——東アジアの近代』岩波書店 岩波新書（新赤版）1340
- (7)張競(2011.11)『異文化理解の落とし穴——中国・アメリカ・日本』岩波書店
- (8) 井上一幸(2011.12)『「すいません」が言えない中国人 「すいません」を教えられない日本人—中国人と日本人のための研修テキスト—』健康ジャーナル社
- (9)副島隆彦 (2012.1)『中国は世界恐慌を乗り越える』 ビジネス社
- (10)相原茂(2012.1)『相原先生の謎かけ中国語講座』講談社
- (11) まごききうける 孫崎 享 (2012.3)『不愉快な現実——中国の大国化、米国の戦略転換』講談社現代新書 2149
- (12)太平洋戦争研究会編 森山康平著(2012.3)『満州帝国 50 の謎』ビジネス社
- (13) [著] 宋文洲 [協力] NHK「仕事ハッケン伝」(2012.6)『人生を面白くする! 仕事ハッケン術! 』主婦と生活社
- (14)白石隆 ハウ・カロライン(2012.7)『中国は東アジアをどう変えるか』中央公論新社 中公新書 2172
- (15)編集人 小室博一 (2012.8)『JTB の交通ムック 14 新幹線と世界のライバル』JTB パブリッシング